



第110号
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」
2023.9.1

定例総会

&

午後のポエジア

開催します！

10/15
(SUN)

豊平館
(中島公園内)

今年は6月に創立35周年記念演奏会を開催しましたので、恒例の朗読会は10月に定例総会と合わせて行うことになりました。

今年の朗読会は、本来の「午後のポエジア」のペースで、詩の朗読をはじめ、歌、楽器、舞踊、映像、発表、演劇等、会員の皆様の自由な発想で、軽快、重厚、分け隔てなく、多様な表現、演出の担い手を募っています。

豊平館の素敵な空間で、会員及びご縁のある皆様と共に、ポーランド文化との交流の楽しいひとときになればと思います。



国指定重要文化財 豊平館

- ◆第37回 定例総会 1F下の広間 ※本会会員向け
15:30~16:30 総会 ※入館チケットは当会が用意します
16:30~17:00 休憩・館内見学
総会のご出欠は同封のハガキでご回答ください。〆切：10月1日

- ◆第12回 午後のポエジア 2F広間 ※どなたでもご参加いただけます
入場無料。ドリンク・軽食付(持ち込み可)



- 17:00 開場 ※これ以降の入館は無料
事前の入館・見学は¥300 自己負担
- 17:30 写真撮影・「午後のポエジア」開会
第1部・第2部
- 19:30 終了

助成：  ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

「午後のポエジア」のご出欠・出演申込は、同封ハガキ/メール/電話で10月1日までにお知らせください
メール hokkaidopolandca@gmail.com, 電話&FAX 011-556-8834



昨年の懇親会風景 (豊平館にて 2022.10.30)

カルデラウンジ
カフェ&バーガー
in
赤井村



2023. **11/5** (日) 14:00~
札幌エルプラザ 4F 中研修室 (北8西3)

『カティンの森のヤニナ
独ソ戦の闇に消えた女性飛行士』
小林文乃 (著) 河出書房新社 2023.3



1936
Janina Lewandowska

私が書きたかったのは、女性が職業を持つことさえ難しかった時代に、空に憧れてパイロットになり、自分が選んだ道を精いっぱい生きた1人の女性がいたということです(著者インタビューより*)

小林文乃氏ご来札！ トークショーへご招待

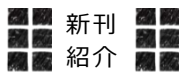
特別ゲスト 富田武 成蹊大学名誉教授

どなたでもご参加いただけます。入場無料、定員50人

申込み(推奨)・問合せ先(安藤) 080-4071-0956, hokkaidopolandca@gmail.com

助成： ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

後援： 北海道大学
スラブ・ユーラシア
研究センター



新刊
紹介

1940年春に起きた「カティンの森事件」は、ポーランド軍将校ら約2万人が殺害された事件として知られる。当初はドイツ軍の仕業と見做されていたが、ソ連保安機関によるものとの認識が広がり、1990年4月にはペレストロイカ期のソ連が自らの犯罪と認めるに至った。



資料集も出され(モスクワ 1997)、スターリンが承認し、内務人民委員部が指揮してコゼリスク、スタロベルスク、オスタシュコフの3収容所からスモレンスク郊外のカティンの森に集めたポーランド人捕虜を処刑したことも明らかになっている。アンジェイ・ワイダ監督の映画『カティンの森』(2007)は、事件に対する国民の関心を大いに高めた。

しかし、処刑されたポーランド人の中にただ一人女性が含まれていたことは、まったく知られていなかった。実は生き残りの証言があり、彼女の故郷では、英国で1975年に出版された本のコピーが回し読みされ(統一労働者党=共産党の支配下)少しずつ知られていた。彼女が何者であるかについては、カティン博物館でしか分かっていなかった。著者の小林はそれをザヴォドニーの『消えた将校たち〜カティンの森虐殺事件』で知ったという。

探求熱心な小林は2019年6月カティン博物館映像コーナーで、その女性がヤニナ・レヴァンドフスカという、ポーランドの名高い将軍の娘であり、自らも飛行士だったことを知った。

ところが、ポーランド人自身がレヴァンドフスカのことを知らない。小林はオシフィエンチム(アウシュヴィッツ)を訪問し、ついでグダニスクの「第二次世界大戦

博物館」で、ヤニナには妹アグネシュカがいて、姉はカティンの森でソ連軍に、2カ月後に妹はパルミリの森でドイツ軍によって処刑されたことを知った。

ついで訪ねたポズナンはヤニナの父のムシニツキ将軍と縁が深く、彼が第一次世界大戦直後にドイツ軍残党を追い出した蜂起の指導者だったことも判明した。ヤニナはここで、当時のヨーロッパでの飛行ブーム(アレクシエーヴィチも『戦争は女の顔をしていない』で言及)の中で、女性としては珍しくパイロットになった。小林はポズナン郊外のムシニツキの故郷ルソーヴォヤ、2021年にはパルミリの森にも出向いている。

こうして小林はジャーナリスト、ルポライターらしい取材によって「カティンの森」事件に関する日本人の知見を大きく広げてくれたばかりでなく、18世紀末のロシア、ドイツ(プロイセン)、オーストリアによる分割以降のポーランド史の、ヒロイン一家にかかわる重要な出来事にも言及している。軍人ではムシニツキの同僚で独立回復の英雄ユゼフ・ピウスツキ、ムシニツキの部下でポーランド軍団を率いて第二次大戦で活躍したアンデルスが登場する。ヤニナの果たせなかった夢は、ポーランド人パイロットからなる「第303コシチュシコ戦闘機中隊」の対独戦で実を結んだとも言える(コシチュシコはポーランド第二次分割に抵抗した英雄)。史実の羅列ではない「物語としての歴史」である。

久しぶりにワクワクしながら読んだ本だ。札幌でのイベントを楽しみにしている。
(富田武)



イエジー・スコリモフスキ 監督
『EO イーオー』を観て

旅するロバの物語、全世界が息を呑んだ、現代の寓話×無比の映像体験



□ ベール・ブレッソンの『バルタザールどこへ行く』（1966）から着想したという今作品。一昨年春、札幌で上映された『バルタザール〜』を観ていたので、対比ができた。『バルタザール〜』は少女マリーとバルタザールという名のロバの話で数奇な運命を描いている。これは『EO イーオー』のサーカスの女性カサンドラとの関係に類似している。私にとってカサンドラを演じるサンドラ・ジマルスカは初見であるが、魅力的。EO はあちこち引きずり回されて、ロード・ムービー的な要素もある。『EO』を観終わって、これは今話題

を集めている難民問題をロバに仮託させた作品ではないかと思った。G7の難民認定率は格差がありすぎて驚かされる。イギリス、カナダは60%台、フランスでさえも17.5%なのに日本は僅か0.7%である（2021難民支援協会）。EO は「難民」のように思われた。これは私個人の思いであるが…。
エンドクレジットで、ロバは6頭使われたことが判る。それとロバにとっては冤罪だが、サッカーのゴールをめぐる乱闘騒ぎが印象に残った。また、撮影の陰影さがよかった。流石 J.スコリモフスキである。（佐藤見一、会員）

や さしい瞳をもつロバと一緒に旅をしながら、多くのものを感受する体験型映画だった。すでに内面にある問題意識、願望、嫌悪、不安をあぶりだす仕掛けがあるのではと、不思議な感覚に囚われた。最近になって、『バルタザールどこへ行く』も鑑賞でき、前後して記憶をたどる体験の楽しさも加わった。金属スクラップヤード、対人地雷の探知除去の犬型ロボット、巨大ダムからあふれ出す水、風力発電の風車が回る広大な土地、そして森の中で。ほとんど演技もせりふもないまま、ロバ EO（イーオー）の神々しいほどに美しい佇まい。映像に魅了されながら、なにかざらつきを残すのだ。人間社会のフリーガンの過激さ、肥満、タトゥー、薬物、近親相姦、殺人、貧困、動物虐待のモチーフがちりばめられ醜悪さが極る。本作は、より複雑に絡み合う社会の中で生きる今に、ささる作品だった。（氏間多伊子、会員）

□ バの目は実に美しい。純粋さや愁い・悲しみを湛えている。実際、ロバの出てくる映画には秀作が多く、今年だけでも『EO』、『イニシエリン島の精霊』、『小さき麦の花』が公開された。ロバの鳴き声は人間の言葉では表現できない。まるで、この悲しみを伝えきれないもどかしさを表現しているかのようだ。
本作は『バルタザールどこへ行く』（ロベール・ブレッソン監督 1966）にインスパイアされて制作されたものという。『バルタザール』は私にとって人生ベストの一本であり、涙なしには見られない。だが、本作は『バルタザール』よりもロバの目から見た人という視点、人間の愚かさをより強調しているという違いがある。強いて難を挙げれば、『バルタザール』を見た後では本作には若干の既視感がある点だが、大きな問題ではない。
『バルタザール』はドストエフスキー作『白痴』の第1部第5～7章を元にしてしている。スイスで病氣療養中のムイシュキン公爵がロバの鳴き声を聞いて深く感動する。その話を聞いてエパンチン将軍夫人は「ロバですって」と驚き、娘達は大笑いする。ロバという言葉には愚か者の意味があるからだが、ロバはイエス・キリストがエルサレム城に入城した時に乗っていた動物で、キリスト教では「聖愚者」でもある。（そのパロディとしてドン・キホーテの従者サンチョ・パンサもロバに乗っている。「バルタザール」とはイエスが生まれた時、「神の子」だと告げに来る「東方の三博士」（マタイの福音書）の一

人である。）人から馬鹿にされ笑われているが、その心は純粋で美しい。美しすぎるのだ。両作ともヒロインがロバに示す愛情は深く、ブレッソン監督は「ロバはエロティックな動物である」と語っている。
また、イギリス童話『くまのプーさん』には悲観主義的でのろまだが、お人好しなロバの縫いぐるみ「イーヨー」が登場する。ロバの鳴き声からネーミングされ、ディズニーでアニメ化された。
大江健三郎は『静かな生活』で、知的障害があるが音楽的才能を持つ長男の光をモデルにした「イーヨー」という人物の成長と知的障害者との共生をテーマとする物語を描き、義兄に当る伊丹十三監督が映画化した（1995）。この作品も「聖愚者」的な要素を持った物語といえる。
『白痴』では、ムイシュキン公爵は滝の音を聞いて、しみじみとした感情を抱く。『バルタザール』では滝のシーンは少ししか描かれていないが、本作ではダムから轟音をあげて落下する水のシーンとして描かれ、実に素晴らしく神々しいほどだ。それに引き換え、次々と起こる人間の行為の何と愚かなことか。
『バルタザール』も『EO』も、人間の罪を背負って十字架につくイエス・キリストに見えてくる。即ち、「バルタザール≒EO≒ムイシュキン公爵≒イエス・キリスト」と見て大きな誤りはあるまい。私はこれからも両作を見続けていくことと思う。（池田光良、会員）

創立35周年記念演奏会を鑑賞して～印象記 村田 雄穂



本協会創立35周年を記念する演奏会が6月3日に開催されるとの案内をいただき、私はすぐに、それまで地元で入っていた仕事の予定をキャンセルし、最優先で札幌へ行く計画を立てました。札幌で夕方から夜に行われる催し物に出席するには、私の住む帯広からだ、一泊二日の日程を組まなければなりません、プログラムを知り、これは絶対に見逃すことのできない機会だと思ったのです。

今回の演奏会のテーマが「ショパンと華麗なるポーランド音楽」となっていますが、二部構成で、独演者、連弾演奏者、伴奏者を合わせて、なんと十五名の音楽家たちが、次々と演奏を繰り広げました。これだけの人数で紡ぎ合わせるポーランド音楽の奥深さと多様さは圧巻でした。2時間ほどの時間があっという間に過ぎて行ってしまいました。

第二部の冒頭で、三浦洋先生が、2021年の「ショパン国際ピアノコンクール」を引き合いに、日本におけるショパンの圧倒的人気に言及しておられました。私も前回のショパンコンクールの経過を、YouTubeの配信でかなりの時間観ておりましたが、私が約5年前に本協会に入会したのも、ショパンのバラード4部作にとりわけ感動し、またそれと関連して、アダム・ミツキューヴィチの文学にも触れたのが動機の一つでした。

でも、「ポーランド出身の音楽家はショパンだけでないのだ」ということも、この数年間に徐々に知るようになり、今回の演奏会でもそのことを再認識させられました。第二部で演奏された、ヴィエニャフスキ、モシュコフスキ、カルウオーヴィチ等の作品を、初めて生演奏で聴く機会を持てたことは、本当に

貴重な体験で、とても有難く思っています。そして、彼等以外の音楽家もたくさん居ることは知っていますが、それらの曲を生演奏で鑑賞できる機会が少ない、特に帯広では皆無に近いのは残念です。でも、できる限りの手段で、ポーランド音楽をもっと知り、鑑賞していきたいと思った次第です。

演奏会後は、中島公園内を余韻に浸りながら数分間歩き、公園に隣接する宿に戻りました。そして独りで、先ほどの残響の中を漂うのです。残念ながら、私は、まだ一度もポーランドに行ったことは無いのですが、気分だけはポーランドに来ているような想いに耽りながら。札幌までクラシック音楽を聴きに来ることは年に数回あるのですが、夕方の公演の後に、地下鉄や列車に乗ったり、外食をしったりはしません。知人と感想を述べ合うこともしません。感動がぶち壊しになってしまうような気がして。

最後に、この演奏会の企画と実現に向けて大変なご苦勞をなされた会長以下、運営委員の皆さま、そして舞台上で素晴らしい演奏を披露してくださいました演奏者の皆さまに心より感謝申し上げます。そしてまた、次回の周年行事を楽しみにしております。

(むらた・ゆうほ、会員)



=写真=(挨拶) ジェブカ・ラファウ&ガイダ・ズザンナ(第1部) 徳田貴子, 本田真紀子, 田口綾子, 西村範子, 中島幸治(お話) 三浦洋(第2部) 徳田和可&安藤むつみ, 坂田朋優&鈴木飛鳥, 高橋可奈子&畑端梓, 松井亜樹&高橋健一郎, 水田香&北浦由花里

日本に於けるショパンの受容について (1) 川染 雅嗣



2022年9月から23年2月にかけては、ショパンとともに歩んだ月日だった。ある音楽事務所からの依頼を受けて、「なぜ日本人はかくもショパンが好きなのか」という題名のレクチャー・コンサートを、川崎、秋川、浦安の各市で行ったのである。

確かに日本ではショパンが常に人気作曲家の上位に位置しているし、誰もが彼の作品には親しみを抱いているだろう。しかし、そのショパンの音楽がどのようにして明治以降の日本で受け入れられていったのか、ということについては深く考えたことがないのではないかと。それは裏を返せば、それほどまでにショパンの音楽が日本人の生活の一部のようになっているのではないかと考えられるのである。そこで、当たり前となっていることを深掘りしてみたくなった、というのが本来の意図である。時々私の天邪鬼がふと顔を見せることがあるのだ。

このテーマに関する先行研究は数多あるが、中でも秀逸なのが多田純一氏による『日本人とショパン』であろう。筆者の講座の内容もこの論文に負うところが多々あった。レクチャー・コンサートは通常前半に講座を行い、休憩を挟んで50分程度のコンサートを行うというのが、私の流儀になっている。前半の講座のためにいつもレジュメを作成して、来場者に配布している。特にコロナ以後は紙媒体からの感染を恐れて、パワーポイントを使ったスタイルに変化してきたが、私は旧石器時代の人間なので頑なに紙の資料を配布している。

音楽取調掛・伊沢修二

そのレジュメ作成のために調べてみると、実に面白いことがわかってきたのである。話は1879年にまで遡る。この年音楽取調掛が設置され、西欧流の音楽教育を本格的に進めていく。中心になったのはアメリカで音楽教育を学んだ伊沢修二という人物である。この機関は1885年に音楽取調所と名

称を変更し、やがて1887年に東京音楽学校に発展していく。初代校長はやはり伊沢修二である。

ではここで、何故日本は西欧流の音楽教育を国を挙げて行わなければならなかったのかを考えてみよう。時は1853年である。浦賀沖にペリー率いる黒船が4艘やってきて、徳川幕府に開国を迫ったのである。この事件以後日本は泰平の世から動乱の渦に巻き込まれ、ついに鎖国を解き、その上不平等条約まで締結してしまったのである。ここが全ての出発点になり富国強兵、殖産興業を推し進めていき、欧米列強と肩を並べようと艱難辛苦の日々が始まったのだ。その一環として文明開花があり、音楽も西欧流の音楽教育を輸入してくることになる。岩倉使節団の一員として渡欧した伊藤博文が、リストの演奏を聴いて感銘を受け、「彼を日本に呼ぼう」と言ったとか言わないとか、殆ど都市伝説に近いエピソードもある。余談だが、ペリーがやってきた年にスタインウェイ社がニューヨークで創業されている。

さて、前出の論文によれば、日本に於けるショパンの受容には二つの大きな要因が考えられるという。一つはミッションスクールでの音楽教育、もう一つは澤田柳吉というピアニストの存在である。

明治になって日本には多くのミッションスクールが開校された。その多くは女子の教育を中心としたものだったが、同時に音楽教育を行う施設を併設しているところも多かった。このような施設ではピアノの個人レッスンなども行われ、教材としてショパンの作品が取り上げられることも多かったようだ。(続く)

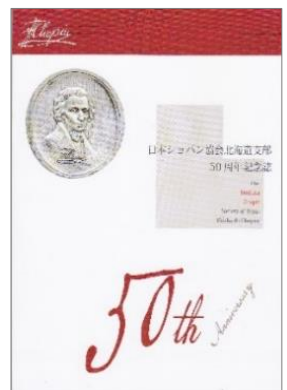
(かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授、会員)

〈後援〉 川染雅嗣ピアノリサイタル in アルテピアッツァ美唄 Vol. IV 小品の森に分け入る～石の声を探し求めて、安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄アールスペース、2023年10月1日(日) 開場13:30 開演14:00、連弾客演: 柝原享子、入場料: 前売り2,000円(当日券2,500円) お問合せ(柝原)090-2076-0487



〈後援〉 日本ショパン協会 北海道支部創立50周年記念コンサート、札幌コンサートホール Kitara 小ホール、2024年1月28日(日) 開演14:30、入場料3,000円、お問合せ(カワイ札幌)011-231-8661

=右図=日本ショパン協会北海道支部創立50周年記念誌 2023.5



ブロニスワフ・ピウスツキ研究の功績で井上絃一、沢田和彦両名誉教授に ポーランド共和国文化功労章「グロリア・アルティス金メダル」授与

5月10日、五月三日憲法記念日に合わせて駐日ポーランド共和国大使館で開かれたパーティの席上、井上絃一教授は、日本公式訪問中のズビグニェフ・ラウポーランド共和国外務大臣ご臨席の下、パヴェウ・ミレフスキ駐日ポーランド共和国大使から、文化分野におけるポーランド最高位の勲章である「文化功労章グロリア・アルティス」金メダルを授けられました。(ポーランド広報文化センター)



ピルスツキアナ・ヤポニカ～受章スピーチ～

井上 絃一

壮年期に二度までも大きな戦争に巻き込まれ、己の生きざまに大幅の変更を強いられた人の不幸はさまざまであろう。リトワニア生まれの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866～1918)は、37才で日露戦争、47才で第一次世界大戦に際会して、前者により己の家族との離別を余儀なくされ、後者は彼の仕事の完成を阻止した。とはいえ彼の悲劇は、19才の冬に露帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に連座して逮捕されたことに淵源する。さもなくば、彼が極東の一角に足を踏み入れるようなことは万が一にも出来せず、したがって、人類学者ピウスツキもその「サハリン民族誌」も、遺憾がなかったであろう。彼の北東アジア研究は、その悲劇的な生きざまの所産と見做すのが至当である(井上 2018: ix)。



私は「ブロニスワフ・ピウスツキに関する総合研究」を“Pilsudskiana”と命名するよう呼びかけている。そこで Pilsudskiana Japonica は日本発のピウスツキ研究を意味し、その嚆矢は1902年の初来日まで遡るものの、掛値なしの Pilsudskiana Japonica は、1980年代に日本で推進された「ピウスツキ蠟管音声再生をめぐる総合研究プロジェクト」で具現化された。同プロジェクト関連の刊行物には Alfred F. Majewicz 編『ピウスツキ著作集』(英文、1998～、全5巻中4巻まで既刊)、沢田和彦・井上絃一編『ピウスツキ評伝』(英文、2010)、井上絃一訳編『ピウスツ

キのサハリン民族誌』(邦文、2018)、沢田和彦著『ピウスツキ伝』(邦文、2019)などがある。

1985年の札幌における B・ピウスツキ国際会議を受けて、1991年には第2回がロシアで、第3回(1999)と第4回(2018)はポーランドで開催された。Pilsudskiana の研究網が整備される中で、ピウスツキの記念碑が(嚆矢は1991年ロシアのユジノサハリンスク、2013年の2号が日本の白老、2017年の3号がリトワニアのズーウフ、2018年の4号はポーランドのジョリにて)建立されてゆく。2013年10月19日、白老のアイヌ民族博物館(現国立アイヌ民族博物館、ウポポイ内)で除幕された第2号の「ブロンズ胸像」は、ポーランド政府が寄贈したものである。

Pilsudskiana Japonica の活動で広告塔を引き受けたのが、ピウスツキの孫にあたる木村和保さんである。彼は日本におけるピウスツキ家当主として国内外で取材に応じ、4度の国際会議でもその重責を全うされた。また祖父の弟ユゼフ・ピウスツキ元帥の孫たちとも家族ぐるみの交流を重ねた。ポーランドでは、ピウスツキ一族で最後の男系嗣子だった木村さんを Kazuyasu Kimura-Pilsudski と称することもあった。まことに残念ながら木村和保さんは昨年12月14日、67才の若さで急逝された。合掌。

この度の受勲は、Pilsudskiana Japonica にかかわるすべての方々へ向けられたものと理解し、私は彼らの名代としてこれを拝受する所存である。

(いのうえ・こういち、北海道大学名誉教授、会員)

=上写真=野本正博(ウポポイ=写真提供)、井上、安藤、沢田

ブロニスワフ・ピウスツキ 105 回忌 ウポポイ 2023.5.17

白老・ウポポイの記念像前でのピウスツキ105回忌に会員三人が参加しました。今年は記念像の建立から十年目です。本州方面の猛暑が嘘のような、冷涼な気候の中、恒例のアイヌ古式舞踊披露の最後には、外国からの訪問客や一般参加者も加わって大きな輪踊りで盛り上がりました。(安藤厚)



ポーランド文化功労勲章「グロリア・アルティス金メダル」を受章して

沢田 和彦

2023年4月23日～5月1日、ポーランドとリトアニアへ出かけた。ポーランドで文化功労勲章の授章式に臨み受章講演を行い、ヴロツワフとリトアニアのヴィリニウスで講演を行うことが目的だった。

4月26日の昼、ワルシャワ郊外スレユヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館へガイドの車で向かった。ワルシャワ都心から南東へ20キロ、車で30分の距離である。2020年にスレユヴェクのピウスツキ家の屋敷に博物館の新館を建設して新たに開館したのである。

文化功労勲章「グロリア・アルティス」には金・銀・銅の3種類があり、金メダルはポーランドで最高の文化功労勲章であることを、恥ずかしながら私は授章式当日に知った。受章理由は、拙著『ブロンスワフ・ピウスツキ伝 〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人』(成文社2019)が2021年にポーランド語に翻訳・出版されて、長年のピウスツキ研究が評価されたことである。弟ユゼフは〈ポーランド建国の父〉と謳われたが、兄ブロンスワフは現在でも国内ではあまり知られていない。

さて授章式では最初にポーランド共和国副首相で文化・国家遺産大臣のピョトル・グリンスキ氏の挨拶があり、氏から私に勲章が授与された。
=右写真=副首相の授章式臨席は異例とのことだった。次いでポーランド科学アカデミーの長老ズビグニェフ・ヴァイチク氏による賛辞(ラウダツヤ)があった。氏は92歳だが、その演説は長時間に及んだ。その後、私が謝辞を述べた。



次に博物館のHPのブロンスワフ・ピウスツキ部門の英語版と日本語版の開始セレモニーが行われた。これまではポーランド語版しかなく、新たに英語版と日本語版を作成することになり、2022年に博物館の依頼で、ポーランド語から英語に訳した大量の原稿を、私が日本語に翻訳したのである。英語版はグリンスキ氏が、日本語版*は私が“Enter”をクリックし、これによって両語版がスタートした。

休憩後、私は「ブロンスワフ・ピウスツキと日本女性」というテーマで日本語で受章講演を行った。これは博物館からの提案によるもので、私の講演をバルバラ・スウォムカさんがポーランド語に通訳してくださった。彼女は他ならぬ拙著のポーランド語訳の翻訳者である。当日も見事な通訳ぶりだった。私はこの講演で、ピウスツキが日本滞在中に交流した女性として、民族学者の鳥居龍蔵の妻・鳥居きみ子、東京音楽学校の女流音楽家、藤井環(たまき、後の三浦環)と橘糸重(いとえ)、婦人運動家の福田英子、今井歌子、遠藤清(きよ)、東京女医学校校長の鷺山弥生(やよい)、日本女子大学の学生たち、日露戦争時の松山のロシア人俘虜収容所の看護婦・宗宮幸子(そうみや・こうこ)、学習院女学部部长・下田歌子を取り上げた。

次いで同会場でワルシャワ大学東欧研究センター主催の「イースタン・レビュー賞」の授賞式が行われた。拙著のポーランド語訳が評価されて、2021年度の同賞(外国作品部門)を受賞したのである。まずセンター長ヤン・マリツキ氏から私に賞状の授与があった。そして旧知の友人アルフレッド・マイェヴィチ氏(ポズナン大学)が心のこもった賛辞を述べてくださった。最後に私が再度謝辞を述べた。当日はワルシャワの大学で日本語を学ぶ学生たちも来場していた。

かくして今回はわが人生初めて多分最後のVIP待遇の旅となり、この日はわが生涯最良の日となった。

末筆ながら、東京のポーランド広報文化センター、ポーランド外務省、リトアニア駐在ポーランド大使館、ポーランド通信社、ワルシャワ大学東欧研究センター、ユゼフ・ピウスツキ博物館と副館長ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ氏、ヴロツワフのグロトフスキ研究所と所員プシエムイスワフ・ブワシュチャク氏に感謝の意を表す。(さわだ・かずひこ、埼玉大学名誉教授)



ウポポイ開業三周年記念式典 2023. 7. 8

ピウスツキ忌のご縁で記念式典に招かれ、幻想的な伝統芸能を鑑賞し、併せて博物館の特別展示「“アウタリオピッタ”アイヌ文学の近代～バチラー八重子、遼星北斗、森竹竹市」6/24-8/20も見学してきました。

皆様も一度ウポポイを訪ねてみては如何ですか。(安藤厚)

=写真=式典の特別公演『イノミ』でフィナーレを飾った「イヨマンテ リムセ」(熊の霊送りの踊り)(ウポポイ提供)

《ポーランドだより》13-4

俳句日本語訳：津田晃岐
przekład na japoński:
Terumichi Tsuda



ポズナン市エスコラピオス会聖ヨゼフ・カラサンス学園



IV konkurs literacki "HAIKU - POEZJA JAPOŃSKA" (2023 r.) - NAGRODZONE WIERSZE

Zespół Szkół Zakonu Pijarów im. św. Józefa Kalasancjusza w Poznaniu

jesień chłodniutka, 寒い秋
bawi się z wiatrem w berka, 風と楽しく
świetnie się bawi 鬼ごっこ
Zofia Hejne, 3a SP
ゾフィア・ヘイネ 小学校3年A組

kolorowy liść 落ち葉 バサッ
bęc na małego jeża ちび針鼠の
na małe kolce とげの上
Maja Zduniewicz, 3a SP
マヤ・ズドゥニェヴィチ 小学校3年A組

ktoś stuka do drzwi 戸がコンコン
biegnę otworzyć 急いで開ければ
wiosna mnie odwiedziła 春が来た
Gabriela Cieśla, 6b SP
ガブリエラ・チェシラ 小学校6年B組

wracam ze szkoły 下校の途
wiosna pełna radości 春がうれしい
mogę być spokojna もう安心
Jagoda DREWNIAK, 8b SP
ヤゴダ・ドレヴニャク 小学校8年B組

pełnia księżycy 満月の
odbija się w tafli 薄氷に映ゆ
brudnej kałuży 水溜まり
Jadwiga Szymańska, 8b SP
ヤドヴィガ・シマンスカ 小学校8年B組

nadchodzi wiosna 春 思い出
wspomnienia znów przychodzą 帰りたい—けど
chcę tam wrócić, lecz jak...? どうやって...?
Maria Sobczak, 1a LO
マリア・ソブチャク 高等学校1年A組

nie jest możliwe 摘もうにも
zerwanie tego, czego 摘めない—目にまだ
nie widać okiem 見えぬもの
Julia Chustak, 1a LO
ユリア・フスタク 高等学校1年A組

◆選評 コンクール組織委員会 津田晃岐
今年のコンクールは、これまで審査員を務めていた津田モニカ氏(日本学者・俳人、ポーランド人)の逝去にともない、審査メンバーが、筆者(当学園高校ポーランド語・日本語教師、前回から継続)、ヨアンナ・クチ氏(同小学校ポーランド語教師、継続)、クリスティナ・プシェスワフスカ氏(同小学校ポーランド語教師)、クシニョフ・ヴァイトチャク氏(同高校ポーランド語教師)、そして梅田アグニエシカ氏(俳句を専門とし自ら句会も主宰する日本学者、ポーランド人)と、大きく変わった。今回も、去年のコンクール同様、全校生徒を対象とした。つまり、日本語学習者かどうかを問わず、当学園を構成する8年制の小学生と4年制の高校生の全員に参加資格を上げた。

応募期間は3月1～17日。句を詠んだ季節に取材したポーランド語の五七五を募集し、投句数は79句。季題は時候、動植物、生活など多岐にわたった。

入賞が、コンクール規定に定めた「3～5句」を超える7句となったのは、投句数が予想をはるかに上回ったこと、そして何よりも、この7句が同程度の審査員票を集めたことが理由である。無理やり5句に絞ることで得られるものよりも、失われるものの方が多いと判断した。なお、応募者の年齢(小学3年生～高校4年生)に大きな幅があったものの、選に際して特に区分や部門を設けることはしなかった。

入賞7句の微笑ましい素直さ、胸のすくような透明感、共感を誘われる眼差しなど、生徒たちの日常の「スケッチ」を味わってもらえたら、主催者としても訳者としても、これ以上の喜びはない。ちなみに、ガブリエラさんは2年連続の入賞である。

(つだ・てるみち、ポズナン市エスコラピオス会
聖ヨゼフ・カラサンス学園高等学校教員)

「北海道詩人協会賞」を受賞して



二〇二一年に詩人協会のご縁で北海道ポーランド文化協会に入会させて頂いた越野誠です。このたびは北海道詩人協会賞の受賞に伴い、お祝いのお言葉をとたくさん頂きありがとうございます。

第二詩集ということで、第一詩集と比べ人間的に成長している面も見られると私自身読み返し感じております。その成長の糧となりましたのは、皆さまとの出会いが大きかったのではないかと思います。ポーランド訪問経験もない私を温かく受け入れてくださり、各イベントへの招待や会報への寄稿など多くの経験をさせて貰い、成長させて頂いたと感じております。いつかはポーランドの地を訪れたいです。

もちろん、まだまだ皆様に比べますと未熟な部分が多々あり、受賞と言えども今後への期待を込めての受賞と心得ておりますので、変わらぬご指導を頂ければ幸いです。

詩をメインとしておりますが、俳句も短歌も小説も同じように好んで書いております。他の人と比べて自分には書く能力しか残されていないため、マルチに文学に取り組むことが将来へつながっていく道であり、皆さんへの恩返しの手段であると感じております。どうぞよろしく願っています。

終わりに、このたびの第二詩集より、将来への抱負も込め、詩を一篇掲載させて頂きます。「3年後」という未来は光り輝いている。そう願った作品です。

越野 誠(こしの・まこと)

3年後

小篠 真琴

3年後

蒔いた種からのびた芽が

大きな実りをつけているでしょう

大きな葉には近所の子どもがらくがきをして

夜景に勝るイカつけの

漁船の光に似ているでしょう

らくがきは

いつもさくらの桃の花弁と

黄色い帽子をかぶった子どもが

横一列にならんで

しぼんだピグモンみたいな顔をしながら

夜景のイカつけ見守っていく

3年後

花散るときはいつでもでしょう

散った花なら 散り抜けるのなら

残った枝葉をかるくむすんで

役者に憧れ舞踏をはじめ

枝葉には

いつも樹液があふれていて

散る花はいつか風に巻かれて扇となり

玄関まえの水彩画かな

踊された舞踏が画面の

ように視界でふわついていて

また3年後の時を待つのだ

3年後

かつての私はここにいないでしょう

3年後

私は必ず光りがやき

枝葉も実りも葉のらくがきも

みんな串だんごにする

お茶をすすって大笑い

そんな3年後が待ち遠しい



ポーランド発祥のアートマイム 木内 ゆか

ポーランドにはステファン・ニジャウコフスキという世界的に有名なマイムアーティストがいます。彼は芸術の分野で長年貢献したため、二度にわたり勲章とメダルを授与されました。そして喜寿を超えた現在でも舞台の上で圧倒的な存在感を放ち続けています。



私は東京で、彼の孫弟子にあたる日本の方(JIDAI)から、このポーランド発の「アートマイム」を習っています。レッスンはまず凝り固まった筋肉を自分で発見し触れることから始まります。五年通っておりますが、長年の習慣で身に付いた心身の癖は頑迷です。私は赤ちゃんやあらゆる生き物に通底する普遍的な「感覚」を取り戻したくて、毎週東横線に乗っているのかもしれない。

先生は五十代の男性です。彼の手は白い木の花のように咲き、軟体動物のように泳ぎ去ります。ネコ科として歩き、オオカミのように遠吠えします。枯れ木として乾燥し、死体として転がることもあり

す。まるでスカーレット・ヨハンソンが主演した映画「LUCY」を観ているかのようです。

ピエロの大道芸がトリックで笑わせてくれるのとは対照的に、このポーランド発のマイムは身体から身体に共鳴させる「詩」と言われています。それは言葉にする前の「感情」であり、延髄で見る「夢」のようでもあります。私たちの身体は太古の記憶を満々と湛える(メモリースティック)で、脊髄では東洋と西洋の海が渾沌と渦巻いているようにも思うのです。

(きうち・ゆか、北海道詩人協会会員、横浜市)

=左写真=ステファン氏主催のマイム公演に招聘されたJIDAI氏(2023.5、ワルシャワ)

* <https://jidai9.wixsite.com/jidai> / <http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE83-84ArtMime.pdf>



ポーランドとの出会い 林 祥史



新会員の林祥史です。去年3月に10年ぶりに札幌に帰ってきました。北海道でもポーランドとつながりを持つことにこの上なく喜びを感じます。現在は札幌市内の高校で英語教員をしています。コロナ禍の少し前まで大学院生として北欧フィンランドで研究をしていました。

2008年に愛知の高校から北海道大学に進学しました。ポーランドの方と接する最初の機会は、専門の哲学の研究者や私が大学生活を送った恵迪寮にいた留学生でした。また、寮の後輩がドイツに留学した際お世話になった親友がポーランドの方で、彼の話の影響でポーランドがますます好きになりました。

その他、2年生の春休みにオックスフォード大学とソルボンヌ大学に留学した際も、現地で助けてくれたのはポーランド人の研究者でした。このようにポーランドとはどこに行ってもご縁があり、不思議に思います。

以上のようなご縁のためか、卒業後に3年間の社会人生活を経て海外の大学院への進学を検討した際、ワルシャワ大学の大学院も有力な候補になりました。その時の現地の大学担当者の対応や友人たち

の助けが心を打ち、留学先にはならずとも私の特別な国になりました。進学したヘルシンキ大学院では研究室の同期のお母さんがポーランドの方でした。その同期が突然ポーランド語を話し始めたり、暇があれば古いポーランドの映画を持ってきたりするので、結局ずっとポーランドへの愛着は薄れませんでした。

友人の実家のある田舎町の風景、夜行列車で行ったクラクフの暁、おとぎ話の中に紛れ込んだかのようなウォヴィチのお家——コロナ禍を経た今思うと、幻のような風景でした。

あれほどに素敵な人たちと出会い、夢のような時間を過ごしたポーランドという国は、私にとって一生かけがえのない特別な存在です。帰国した今でも繋がりが持ててこの上なく嬉しいです。(はやし・よしひと)

シンボルスカとミツキューヴィチ 小池 敏大

「インスピレーションは、特定の詩人や芸術家だけの特権ではない。それは、今までも、今現在も、そして、これからも…いつだって、ある決まった人々の元に訪れるもの。それは、自らの使命を意識的に選択し、自らの仕事に愛を注ぎ、想像力を働かせる人の元にこそ訪れるもの」(ノーベル賞講演)



これはポーランドの詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカの言葉です(英語版より)。この言葉との出逢いは、私がシンボルスカの詩の世界に初めて触れた瞬間でした。この言葉は、私がポーランドという国、その文化を知っていく中でますます熱を帯びています。

それを強く感じたのが、2019年に東京で上演された創造演劇『祖霊祭 DZIADY』(ジヤディ)を観劇した時でした。アダム・ミツキューヴィチの作品に着

想を受け、ポーランドと日本に共通する先祖供養をテーマにしたこの作品は「過去とどう向き合うか」という視点を投げかけてくるように感じ、実際、日本の沖縄とポーランドのワルシャワで見た光景を私の脳裏に強くよみがえらせてくれました。

ご縁を戴き入会させていただきました。今後、皆さまとますます交流を深めさせて頂きましたら幸いです。

(こいけ・としひろ、岐阜県高山市)

※以下は、2019年の日本とポーランドの国交樹立100周年に際して寄稿したエッセイの一部です。

演劇『祖霊祭 DZIADY』に学ぶ 小池 敏大

日本とポーランドには、古くから伝わる、互いに似通った慣習がある。その一つが「祖霊祭」と呼ばれるものだ。

日本では「お盆」がその一例で、年に一度、8月の中旬に、先祖や亡くなった方々の霊魂たちが浄土(仏教の用語で、死者の住む死後の世界)からこの世に戻るのを迎え入れ供養する行事である。私たちはお盆の時期に生まれ故郷に帰省し、家族や親戚と再会し共に先祖の墓を訪れる。いわゆる「墓参り」の慣習だ。墓に行くと、苔や草をむしったり、冷水を掛けて墓を磨いたりして、綺麗に墓を清掃する。そして家族や親戚が揃って先祖の墓に線香を上げ、先祖達に日々の生活の安寧を感謝し、彼らの魂の安らぎを祈念する。また、お盆に入る時期に地域や家族で「迎え火」を焚き、先祖達の霊を迎え入れることもある。この他、盆提灯を灯したり、長崎では先祖の墓前で打ち上げ花火を上げて、盛大に先祖をお迎えするという慣習も行われている。

一方、ポーランドには毎年11月に“Dziady”と呼ばれる先祖供養の日があり、一家で先祖の墓を訪れ、



墓を清掃しキャンドルや花を手向け、また食事や飲み物を先祖達に供え、彼らの霊魂を迎え供養するという行事がある。

“Dziady”はポーランドに古くから伝わる土着の死者の霊魂を供養する伝統的慣習で、後にポーランド全土に広がったキリスト教文化よりも早く、深く人々の心に根付いているといわれる。〈…〉

私が“祖霊祭”を知ったのは、創造演劇『祖霊祭 DZIADY』との出会いがきっかけだった。ポーランドの国民的詩人アダム・ミツキューヴィチ作『Dziady』をもとに、“先祖を迎え先祖の霊魂たちを供養する”というポーランドと日本の共有する慣習をテーマに、一つの

演劇舞台の上でポーランドと日本の“先祖供養の祭典”を融合させ、二つの国の霊魂たちを舞台に迎え入れ共に供養するという作品である。

私は2019年5月、東京・浅草の浄土真宗の寺院・西徳寺で、日本・ポーランド共同創造演劇『DZIADY 祖霊祭』を鑑賞し、両国の過去との向き合い方を学んだ。寺院という死者たちの霊魂を供養する空間を舞台に、僧侶たちの読経が始まり、全員による読経が、時々一人に変わったり、また数人に変わったり、さらに僧侶たち全員による読経に戻ったりと、まるで轆轤を廻しながら、こねた土を大きく広げたり、小さく萎めたりして器を創りあげてゆくように、僧侶たちの経を読む声が膨らんだり、萎んだり抑揚を繰り返しながら、寺院の中に不思議な空間を創り上げていった……

長い黒髪の全身黒づくめの衣装の、異教の儀式を司る祭司の魔術師の男性と、日本の浴衣姿の、猫の面を着けた女性が舞台に現れ、輪舞曲(ロンド)のようなポーランドの民族音楽と思われる曲に合わせて、一組になって踊り始めた。曲に合わせて、明るい歌声が入ったり、その歌声が何かに取り憑かれたような、狂気じみた叫びに変わったりして、殺伐とした空気に舞台一帯が包まれた。

場面は変わり、日本の音楽(東京音頭)が流れ、浴衣姿の狐やひよつとこの面を着けた死後の世界から来た祖霊たちが音頭に合わせて踊り始める。日本の盆踊りの光景だ。彼らはある時は人間の声を出して踊ったり、またある時は鳥や猫といった動物の鳴き声を出して音頭に合わせて踊ったりした。〈…〉

(初出「日本・ポーランド
国交樹立100周年記念
エッセイコンテスト入賞
作品集」2020/1/31*)

=写真=©Maciej Zakrzewski



〈新刊紹介〉

ウアイヌコロ コタン アカラ〜ウポポイのことばと歴史

国立アイヌ民族博物館 (立石信一; 佐々木史郎; 田村将人) 編、国書刊行会 2023.3

2020年に開業した、アイヌ文化の復興・発展の拠点「ウアイヌコロ コタン」(民族共生象徴空間:愛称ウポポイ)の中心施設である、国立アイヌ民族博物館が、園内のさまざまな取り組みと工夫を豊富な写真でわかりやすく伝える、初の公式本。



アイヌの文化と歴史を展示と訪問体験でどう伝えるか?—アイヌ語を第一言語とする展示解説の試みなど、さまざまな取り組みを紹介し、新設に携わった現場の人々の苦心と熱い思いを伝えています。

さらに、前身施設(ポロコタン)からウポポイとして開業するまでの経緯や、開業から3年目で見えてきた課題、今後の展望をまとめています。(安藤厚)



会員動向 (2023.4~8)

逝去:鈴木彰男さん 謹んでご冥福をお祈りします

入会:木内ゆか、小池敏大、退会:エバ コワルスカ、川本彰子、霜田千代麿 (敬称略)

ご寄付 (2023.4~7) 深謝!

(1口千円)(10)霜田英麿(1)本間公平、小林文乃

(順不同)

新年度年会費 (2023.9~2024.8) 納入のお願い

年会費:一般3,000円、学生1,500円

また、維持会費としてご寄付(1口千円:任意)も承ります

◆ゆうちょ銀行振替口座 記号 02740 5 番号 19735 加入者名 北海道ポーランド文化協会

(他銀行から送金の場合)店番(279)預金種目(当座)店名(二七九[ニナナキユウ]店)口座番号(0019735)

※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください

※遠方の方はご寄付(年千円)で会誌 POLE の定期読者になっていただくこともできます。事務局にお問合せください

寄稿募集

本誌への寄稿を募集します。〆切は毎年3月末/7月末/11月末、分量は1000~1500字程度、テーマ、ジャンルは自由です。詳細は下記事務局の電話・メールへお問合せください

POLE110 目次

第37回定例総会&第12回「午後のポエジア」開催します!.....	1
第109回例会特別講演会『カティンの森のヤニナ〜独ソ戦の闇に消えた女性飛行士』著者小林文乃 氏ご来札!トークショーへご招待/〈新刊紹介〉(富田武).....	2
イエジー・スコリモフスキ監督『EO イーオー』を観て(佐藤晃一、氏間多伊子、池田光良).....	3
創立35周年記念演奏会を鑑賞して〜印象記(村田雄穂).....	4
日本に於けるショパンの受容について(1)(川染雅嗣)/〈後援〉♪川染雅嗣ピアノリサイタル in アルテピ アツァ美唄 Vol.IV/♪日本ショパン協会北海道支部創立50周年記念コンサート.....	5
ポーランド共和国文化功労章「グロリア・アルティス金メダル」授与/ピルスツキアナ・ヤポニカ〜受章スピー ーチ(井上紘一)/プロニスワフ・ピウスツキ105回忌 ウポポイ 2023.5.17(安藤厚).....	6
「グロリア・アルティス金メダル」を受章して(沢田和彦)/ウポポイ開業三周年記念式典 2023.7.8(安藤厚).....	7
第4回「HAIKU 日本の詩形」コンクール(2023年)入賞句(津田晃岐).....	8
「北海道詩人協会賞」を受賞して(越野誠)/3年後(小篠真琴).....	9
〈新会員のひと言〉ポーランド発祥のオートマイト(木内ゆか)/ポーランドとの出会い(林祥史).....	10
シンボルスカとミツキューヴィチ/演劇『祖霊祭 DZIADY』に学ぶ(小池敏大).....	11
〈新刊紹介〉ウアイヌコロ コタン アカラ〜ウポポイのことばと歴史(安藤厚).....	12

	発行 北海道ポーランド文化協会	ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方 TEL・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com	安藤厚/新井藤子 池田光良/氏間多伊子 熊谷敬子/松山敏
東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付	TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058	

POLE no.110 (September 2023)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Announcement: 37 th annual meeting & 12 th reading session "Afternoon Poesia" 15/10/2023	1
Special lecture: Ayano Kobayashi, the author of the "Yanina Lewandowska of the Katyn Forest: A Female Aviator Who Disappeared in the Darkness of the German-Soviet War" 05/11/2023 / Book Review (T. Tomita)	2
Impressions of Jerzy Skolimowski's film "EO" (K. Sato, T. Uzima, M. Ikeda)	3
Impressions of the 35 th Anniversary Concert (Y. Murata)	4
Reception of Chopin in Japan (1) (M. Kawasome) / Announcements: Masatsugu Kawasome Piano Recital in Arte Piazza Bibai Vol.IV 01/10/2023 / The Frederic Chopin Society of Japan Hokkaido 50 th Anniversary Concert 28/01/2024	5
Prof. K. Inoue and K. Sawada honored with the Gold Medal "Gloria Artis for Merit to Culture" / 105 th anniversary of Bronislaw Pilsudski's death, Upopoy 17/05/2023 / Ceremony to commemorate the third anniversary of the opening of Upopoy 08/07/2023 (A. Ando)	6
Excellent poems at the 4 th contest "Haiku - poezja japońska" 2023 at St. Joseph Calasanz Piarist School Complex in Poznań (T. Tsuda)	8
Receiving the "Hokkaido Poet Association Award" / Poetry "Three Years Later" (M. Koshino)	9
New members' messages: Art mime from Poland (Y. Kiuchi) / Encounter with Poland (Y. Hayashi) / Wisława Szymborska and Adam Mickiewicz / Learning from the play "DZIADY" (T. Koike)	10
(New Book) The Words and History of Upopoy (Atsushi Ando)	12